

沖縄県青年海外協力隊を支援する会会報

(題字：末次一郎氏)

はいむるぶし

(沖縄県八重山地方の方言で南十字星の意)

〒901-21 沖縄県浦添市前田1143-1
国際協力事業団沖縄国際センター内
TEL. 098-876-6000(代)
沖縄県青年海外協力隊を支援する会
発行責任者：事務局長 平川宗隆

協力隊事業に

さらなる「支援を」

今年秋には天皇・皇后両陛下をお迎えして青年海外協力隊創設三十周年の記念式典が東京において行われます。

協力隊は昭和四十年創設され、三十年の長期に亘るこの間に一四、〇〇〇名に上る隊員を五〇数カ国に派遣してきたことになりました。隊員一人一人の不断の努力の結果が協力隊に対する評価を高め、今なお派遣要請国の増加に繋がっているものであります。沖縄からは昭和四十三年に三名の隊員派遣を始めとして、一四六名が参加しています。今年春募集において八十名に上る沖縄青年男女の応募がありました。これは沖縄では最も応募者の多かった平成六年度に継ぐものであります。特にここ一兩年、他府県に比し協力隊を志す沖縄青年男女の増加が顕著であることは沖縄の将来にとって誠に頼もしい限りであります。



次代を担う沖縄の青年が国際貢献の体験を通して

国際性・協調性・思いやり・責任感等を身につけて帰国するかれらの資質は沖縄の県造りに真に必要なものであります。

改めて申し上げるまでもなく、沖縄は、地理的・歴史的に東南アジア諸国・中国・韓国との交流の推進を可能とする独自の基盤を有しております。これらの地域特性を積極的に活用し活力ある地域社会の形成を目指し、国際交流・協力拠点として経済・文化・学術等の国際交流を積極的に推進することが次代の沖縄にとって重要であると考えます。

国際貢献の在り方が問われて久しく、顔の見えない人的貢献の必要性が社会的に認知れざる状況のなかで、協力隊に対する役割は更に重要性を増しております。


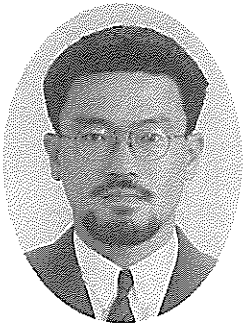
国際貢献の担い手として引き続き新たな隊員の派遣を継続するために応募し易い、隊員として後顧の憂いなく国際貢献に尽くし得る環境整備が重要であると考えます。各市町村における派遣条例、民間企業におけるボランティア休暇制度等の制定により、沖縄の青年男女に国際貢献・国際感覚を身につける機会を与えることこそ次の世代の沖縄のために今求められているものと考えます。更に帰国隊員OB・OGの貴重な経験と資質を地域の共有財産として有効に活用することが村のため・町のため、ひいては県の発展を促す原動力となりものであります。

言うは易くなかなか難しい問題ではありますが、「支援する会」発足二一年目に入り、会員の方々には隊員派遣に係る環境整備に向けての一步一步着実な活動の展開を期待します。

国際協力事業団沖縄国際センター所長
沖縄県青年海外協力隊を支援する会顧問

加藤 進

はいむるぶし

	氏名・年齢	渡眞利 道	35歳
	住 所	読谷村長浜384-4	
	趣 味	旅 行	
	任地・職種	ジンバブエ・音楽教師	
	現在の心境	英語とは一味異なる、世界の共通語“音楽”を通してアフリカのジンバブエと沖縄に流れるハーモニーを作れるように!! ジンバブエでもウチナー民謡を歌いたい。2年間、笑顔で現地の方々と共に時間を共有して素晴らしい時を刻みたいと思います。	
	氏名・年齢	上 地 正 和	27歳
	住 所	読谷村字上地191-3	
	趣 味	マラソン（2年後は夢の2時間台を目指す） 音楽（自分で美しい音を作ってみたい）	
	任地・職種	ケニア・道路設計	
	現在の心境	ケニアに行く為に学校を卒業し、これまで歩いて来たような気がする。沖縄の人間として、私なりにアフリカの人々と接していきたい。	

協力隊事業の現況

1. 隊員派遣現況等（平成7年6月1日現在）

(1) 派遣取極締結国：64カ国

- | | | |
|---------------|------|--|
| ① 派遣実績 | 61カ国 | |
| ② 派遣中の国 | 54カ国 | |
| ③ 派遣中止／見送り中の国 | 8カ国 | インド、ウガンダ、ルワンダ、リベリア、スーダン、ペルー、ブルンディ、イエメン |

(2) 今後派遣取極締結が予想される国 （現在交渉中の国）

ルーマニア、トルコ、チリ

(3) 派遣実績（人数）

- ・派遣中 2,346名 (1,016)
- ・累 計 14,896名 (4,320)

- (注)
1. () は女性隊員数で内数
 2. 女性隊員比率 派遣中43% 累計29%
 3. 人数には、一般隊員、シニア、短期緊急、調整員（除く休職調整員）を含む。

ほいむるぶし

報告 「協力隊現地視察の旅」

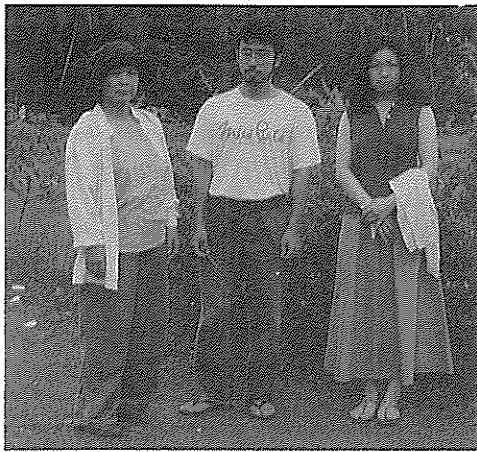
琉球大学教育学部教授の小島環禮氏ご夫妻は昨年(平成六年)の九月五日から十二日にかけて、(株)協力隊を育てる会主催の平成六年度協力隊活動現地視察の旅に参加し、スリランカで稲作隊員として活躍中のご子息(小島伸幾隊員 平成五年第二次隊)を訪問された。その時の現地レポートを依頼したところ、ご多用中にもかかわらず、ご快諾いただきました。紙面を借りてお礼を申し上げます。

スリランカでの若者たち

小島環禮

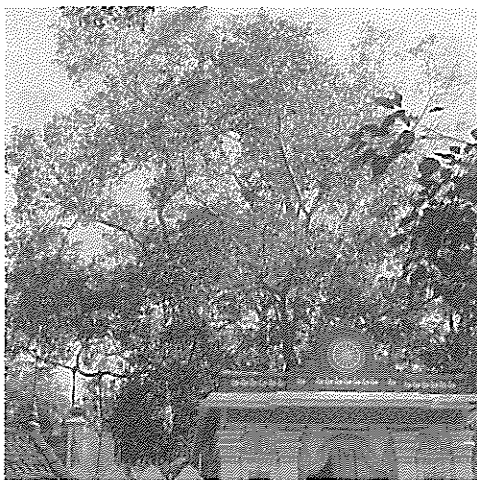
すっかり暗くなったコロombo空港に着いた。荷物を受け取り、外に出る。すぐにそれとわかる出迎えの隊員のなかで、サリー姿が目をはきく。エスニックなおしゃれ、と一方で思いながら、これが異郷の暮らしにとけこんでいる隊員の姿なのだと感じた。

次男と七日間生活をともにしながら、この印象が正しかったことがわかった。一風呂浴びたあと、次男はサロンを巻いて出てきた。一日三度のカレーを、みごとに三本の指でたいらげる。いかに地元の人たちと同じ暮らしをするか、それを



ガンパハの実験農場の水田前 家族と

一瞬一瞬気遣ってすごしていることが痛いほどわかる。ほかの隊員の方々もまったく同じらしい。協力隊の指導方針でもあるのだろうが、それが隊員一人一人によってみごとに異文化に実践されていることが素晴らしい。稲作を担当す



アヌラダプーラ(地名)のスリ・マハ菩提樹(南伝仏教 最古の寺院)

る次男はいう。まず地元の人たちから学ぶのである。同じ時代を生きる人間どうしとして、教えあい、学びあう。そこに心の通じた異文化理解が生まれる。しかも、それはただの旅人のものではない。隊員としての責任を持って異文化と体あたりして暮らす、苦しみのなかから得た尊い体験である。

われわれの世代では、若いときに外国での生活ができた人は、ごく限られている。現代の若者はうらやましい。と同時に、このように人間と人間のつきあいという新しい異文化観を経験的に身につけた若者が増えていることが嬉しい。協力隊の最大の成果は、この点にあるのかもしれない。

こうした日常に加えて、研修旅行が認められているのも貴重である。私たちを案内しての旅には、次男にとってもたいせつな知見が多かった。

次男の仕事場であるガンパハの水田は、稲刈りも終わって整地されていたが、中部地方は刈り取りの最中である。雨期直前の乾燥地帯は、熱帯の冬景色を呈していた。

隊員や家族の方々から、いろいろな話を聞いた。隊員はみんな熱心に仕事に取り組んでいる。いかに有意義な二年間にするか、苦悩している。問題は、むしろ国の機関が、隊員の熱意にこまかい支援をするかである。

そして、このような深みのある人間観を身につけて帰国した隊員を、社会がどのように生かすことができるか、われわれも考えてみなければならない。

はいむるぶし

平成七年度各県協力隊を育てる会

事務局長会議開催

平成七年度各県協力隊を育てる会事務局長会議が、去る六月二十四日(土)東京広尾の協力隊事務局大会会議室において開催された。各県育てる会、支援する会等二十二組織から二十六名、(出)育てる会役員九名、同事務局職員八名、協力隊事務局から局長以下三名、オブザーバーとして近く設立予定の埼玉県から二名が参加し盛大に開催された。

各県の育てる会も年々多くなり、さしもの協力隊事務局の大会議室も狭くなり、次回は講堂に場所を移そうという話しも出た。

会議の議題は、一、三十周年記念事業関連行事について、二、クロスワード誌拡販等について、三、小さなハートプロジェクトについて、四、開発教育の推進について、五、その他、各県からの提出議題について等であり、限られた時間で熱心に議論が交わされた。

平成七年度第一次隊員、壮行会を挙行!

平成七年度第一次隊員に本県から上地正和(ケニア・道路設計)、渡真利 道(ジンバブエ・音楽)、村上恭子(パラグアイ・看護婦)の三名の新隊員が派遣されることになっており、その壮行会が協力隊OB会主催で去る七月四日、那覇市内の居酒屋「かじまや」で行われた。OB、OG多数参加のもとに、各人の経験談を聞いて新隊員もいくらか気が楽になったようである。二年間の活躍を期待する。

稲嶺会長アフリカ訪問へ

沖縄県協力隊を支援する会の稲嶺恵一会長は、国際協力事業団沖縄国際センターから協力隊進路相談カウンセラーの重責も委嘱されているが、この度、隊員活動状況調査団アフリカ班(エティオピア・ケニア)の一員としてアフリカを訪問することになっている。目まぐるしく変容する開発途上国の現状をつぶさに見ることに、実際の隊員活動の状況を把握し、隊員とカウンセラー間の相互理解と信頼関係を築き、帰国後の隊員に対する適切な指導相談を行えることを主な目的として、九月一日から十四日までの二週間現地を訪問する予定。

新樹会、上原隊員を支援

新樹会(末次一郎代表幹事)ではかねてから、「新樹会国際協力基金」による国際協力活動として、協力隊事業に關しても積極的に支援をしてきたところであるが、この度小さなハートプロジェクトに協力・助成することを決め、県出身隊員の上原亮隊員(タイ国・五年度一次隊・家畜飼育)に三〇万円の助成金を贈った。

上原隊員の任地のチェンライ県チャイ村の入口には十メートルの川が流れている。これまで住民自身によって何度も橋を架けてきたが、雨期の増水で毎回破壊されている。橋が破壊される雨期には川を渡れず、子供たちが学校にも行けなくなる。そこで、上原隊員が中心となって頑丈な橋脚を造ることになったもので、その建設費として三〇万円を贈ったものである。

事務局だより

〔四月〕

二十六日 協力隊春募集説明会(名護市)
善平運営委員

〔五月〕

一日 協力隊春募集説明会(那覇市)
平川事務局長

〔六月〕

二十四日 各県事務局長会議(東京)
平川事務局長

〔七月〕

四日 平成七年度第一次隊員壮行会
(那覇市) 平川事務局長